

## CLCからしだね書店便り

March  
2023

3

## \* 今月のご案内 \*

## 「となり人」を考える会

人が人に寄り添い、共に生きるとは  
 ということなのか。「となり人」  
 をキーワードに、奥野さんのお話を  
 もとに考えていけたらと思います。

※詳細は中面9ページ※

CLCからしだね書店では…

- ① キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、  
 その他一般の良書もそろえています。
- ② お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供  
 しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- ⑤ 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、  
 お好きな本を手にとってお読みください。
- ⑥ 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
- ⑦ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、  
 つながる「対話」の場を提供します。

CLCからしだね書店 & カフェ トライアングル  
 営業時間 11:00-17:00  
 定休日 日曜日と年末年始（※祝日も営業）  
 毎月第3木曜日は書店のみ営業



## おとなのための 神の物語 子どもだったみなさんへ

- 1 カインの献げものが受け入れられなかった理由は聖書には書いてありません。子どもたちの毎日にも理由のわからない涙がたくさんあります。
- 2 こどもたちを苦しめるのは自己評価の低さです。無条件で抱きしめてやりたいですね。そして、そのハグに神さまが手を添えてくださっていることを知らせてほしいのです。
- 3 罪は自己評価の低さから噴き出します。必要なのは罰ではなく、癒しです。傷ついた子どもたちと、私たちの涙が混ざるときに、それは起こります。神さまの胸の中で。
- 4 罪は思いとどまることができます。神さまがそっとしてくださいます。怒りの瞬間に、深呼吸して、神さまの顔を見ることを覚えたいですね。

和紙ちぎり絵：森住 ゆき もりずみ ゆき  
群馬県生まれ。和紙ちぎり絵作家。著書に画文集「Amazing・グレイス」「ぶどうの気持ち」「日めくり片隅の花でも」(いのちのこぼ社)、「思いを伝える和紙のちぎり絵春夏秋冬」(日貿出版社)がある。埼玉県在住。

# こどものための神の物語

かたひと おおずしんいち  
語る人：大頭 眞一

## 第3回 ひげきのきょうだい



神さまは心配だった  
お兄さんのカインが  
弟のアベルをにくんでいたら  
神さまはカインに言った  
「わたしのかおをみてごらん。  
こんなにあなたを愛しているよ。  
あなたの心を  
にくしみから守ってあげよう」  
カインは神さまから顔をそむけた。  
「ぼくなんか、ぼくなんか、  
だれにも愛してもらえないんだ」  
そしてごぶしをにぎりしめた

大頭 眞一 おおずしんいち  
1960年神戸市生まれ。英国マンチェスターのナザレン・セオロジカル・カレッジ(BA、MA)と関西聖書神学校で学ぶ。日本イエス・キリスト教団香登教会伝道師・副牧師を経て、現在、京都府の京都信愛教会と明野キリスト教会の牧師、関西聖書神学校講師、焚き火塾代表。ドリームパーティー発起人。

#### 「服従の心理」

スタンレー・ミルグラム(河出文庫)

(後編)



前回は心理学者スタンレー・ミルグラムの『服従の心理』から、人間の行動がいかに状況や条件に左右されやすいかを見ました。ミルグラムは、「服従実験」あるいは「アイヒマン実験」と呼ばれる一連の実験を通して、人は道徳的に問題がある指示だと分かっているにもかかわらず、状況さえそろえばそれに服従してしまうことを明らかにしました。

ではなぜ人間はいつも簡単に権威に服従して残酷な行為をしてしまうのでしょうか。ミルグラムによると、こうした服従行動が起きるのは、「他者の意図を実現する手段」としての自己認識が生じたときだと言います。

被験者たちは「心理学実験」というもつともらしい大義の下に集められ、専門家にしか理解できない実験目的のために行動するよう指示されました。つまり目的も環境も他者によって設定された状況に置かれたわけです。こうした状況下では、自分の行動が自分の意図や目的から出ているという意識が希薄になり、そのことよって服従行動が生じやすくなったということです。このような人間の精神状態を、ミルグラムは「エージェン

ト状態自体は悪いことではなく、むしろ人類の発展に寄与してきた人間の特性なのです。

しかし行動が無反省に繰り返され、エージェンツ状態が常態化すると、人間は意図や目的といったものに対する意識を持たないでも行動できるようになってしまいます。

単調な作業を繰り返したり、目的のわからないルールに従ったりしていると、「いったいこれは何のためにやるんだ?」といった考えがふと湧いてくることがあります。しかしいちいち立ち止まってそうした考えに向き合っていると、行動自体がおろそかになり、成果を生み出すことができなくなります。そこで組織を指揮する人間は、「そうすることによっているからさうしろ」「それはルールだから従え」といった同語反復で命令を正当化し、個人の内面にエージェンツ的の心性を刷り込んでいきます。そして目的や意味を伴わない同語反復的な正当化になれてしまうと、人間は「命令だから」という、ただそれだけの理由でナンセンスなことや残酷なこともできるようにしてしまうのです。



たとえば、最近問題になっている「ブラック校則」も、以上のような図式で説明できそうです。「ブラック校則」とは、特定の髪形を禁止したり、靴下の色を指定したりといった、学校の外にいる人間からは全く非合理的で無意味に思える校則のこ

ント(代理人)状態」と名付けました。「ユダヤ人たちがガスマ室に移送すべし」との命令に従ったただけだ」というアドルフ・アイヒマン(ナチスのユダヤ人虐殺の責任者)の弁明は、まさに彼がナチスという権威の「エージェンツ」として行動していたことを示しています。

アイヒマンの例に限らず、私たちの日常にもエージェンツ的な行動はあふれています。エージェンツ的な行動とは要するに「他者の意図の実現に協力する」ということで、それなくして社会は成り立たないし、文明が生じることもなかったはず。そもそも仕事というものは大なり小なりエージェンツとしての行動と言えるでしょう。

そして社会が発展して分業や専門化が進むほど、エージェンツ的な行動は増えていくし、行動の本来の意図というものも自分から遠く離れて見えにくくなっていきます(いわゆる「社会の歯車」というやつです)。同時に、エージェンツ的な発想と行動が増えると、社会全体としての効率性も増し、それだけ大きな事業をなすことも可能になります。したがってエージェン

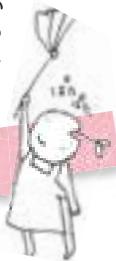
トです。そうした校則が最近まで問題にされず、まかりとおってきたのは、「それがルールだから」という理由でそれらが守られてきたからでしょう。上司や地域社会による、「生徒たちに校則を厳守させよ」という圧力に教師たちが服従し、今度は教師たちが権威者として生徒たちを校則に服従させる。たとえばそれが理不尽な校則であろうと、教師は「ルールはルールだ」という説明しか与えない。そうして納得できないルールに従い続けていると、生徒たちは行動やルールの目的を自ら考えなくなる。こうして上位の権威から下位の権威へと服従を求める圧力が伝えられていき、その過程で学校での服従行動が当たり前になる。その結果、ナンセンスなブラック校則を誰も疑問視しなくなる。

考えてみると、学校という場は、ミルグラムの服従実験に似た構造を持っているようです。多くの生徒たちは主体的に学校に行くことを選択したわけではなく、周りの人も進学するから「それが普通だから」といった理由で(あるいはそうした理由を意図することすらなく)学校に行っています。カリキュラムもあらかじめ決められていて、用意された教科書に沿って学習は進みます。つまり学校においては、目的や環境があらかじめ他者によって設定されているのです。服従実験においても、被験者たちの置かれた環境や行動目的、さらにとるべき行動自体も

あらかじめ決められていました。

こうした状況では自分の行動が自分の意志に基づいているという意識が希薄になりますから、ミルグラムの言う「エージェンツト状態」に移行するのは容易です。そして「エージェンツト状態」の生徒に権威への服従行動を繰り返させることで、行動自体の意味や目的に疑問を抱かない生徒を作り上げることが出来ます。服従実験においても、従順に最後まで電撃を加え続けた被験者は、実験の真の目的を伝えられた後も、自分の行動を後悔したり、自分を責めたりはしなかった、とミルグラムは言います。むしろ自分の行動により大きな責任を感じていたのは、途中で電流を流すことを拒絶した被験者たちだったのです。

繰り返しますが、「権威構造の中に入り、他者の意図を実現するために行動している状態（「エージェンツト状態」）それ自体は悪いことではありません。」「エージェンツト状態」なくして社会は成り立たないからです。大事なのは、自分が他者のエージェンツトとして行動しているのか、それとも自分の意志に基づいて行動しているのかを見極めるため、常に目覚めた意識をもつことです。そうしないと、それと気づかず権威構造にはまり込み、組織的な暴力に加担していた、ということになりかねません。そうした無意識の服従のおそろしさを知るために、ぜひ『服従の心理』を読んでみてください。そして自分がどう感じているかを確かめてみてください。「自分は自律的な人間だから大丈夫



非倫理的な命令はきっぱり拒否できる」と思ったら、それは危険な兆候です。反対に、「私が普段していることは本言に自分の意志に基づいているのだろうか」と不安になったとしたら、それはあなたがこの本のインパクトをしっかりと受け止めたことを意味します。なぜなら、この本が明らかにしたのもっとも重要なことは、「人間は容易に権威に服従する。しかも無意識的にそうする」ということだからです。

以下に引用するのは、服従実験で完全に服従し、「学習者」に最強度の電撃を与え続けた被験者が、実験後にミルグラムに出した手紙の一部です。

一九六四年に被験者だったとき、自分がだれかに危害を加えているとは思っていましたが、なぜ自分がそうしているのかさっぱりわかりませんでした。自分が信念に従って行動しているときと、弱々しく権威に服従しているときとをきちんと認識できている人はほとんどいません。（294頁）

皆さんも『服従の心理』を読んで、普段の自分の行動をじっくり振り返ってみてはいかがでしょうか。

【書店員 G】

今回は、ゲストに、元大阪府立支援学

校教員の奥野泰孝氏をお迎えします。

奥野氏は、学校の卒業式で、「日の丸・君が代」に対し、障書ゆえに起立する（と）できない生徒に苛り添って、共に座り続けることを選びました。ところが、これが職務命令に反するとして「戒告処分」を受けられました。教育者としての支援者として、そして何よりもひとりの人間として、「自身の良心に正直である」としたにもかわりません。奥野さんはこれを不服として訴訟を起こされ、裁判は今も続いています。

いったい、人が人に寄り添い、共に生きるとはどういうものか。「となりの人」をキーワードに、そのなかに奥野さんのお話をまじりながら話していきます。たぐわぬ皆様の参加をお待ちしています。今回初めての方も歓迎です。

# 「となり人」を考える会

2023年  
4月15日(土)  
14:00~16:00

## 「私はなぜ、Aくんといっしょに立たなかったか」

ゲストスピーカー 奥野泰孝氏（元大阪府立支援学校教員）

21世紀に入り愛国心教育が強調された中、イエスは私に何を語れと言われたか。高等学校で「君が代」起立斉唱が始まった時、どうしろと言われたか。特別支援学校で起立斉唱がされる時、どうしろと言われたか。そういうことを語ろうと思います。「不起立」への懲戒処分の取消しを求める裁判や信仰生活で、「となり人」の意味を考えました。また、世界の戦争、日本の社会の問題を見る時「となり人」とは何かを考えました。神が言われる最も大切な二つの戒め「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。」「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。」を持って生きる時、どう生きたいのか、考え悩んでいることを聞いてください。（奥野）  
（私は美術教員として、高等学校・支援学校で仕事をしてきました。「国歌」の起立斉唱実施に対する態度表明で、口頭厳重注意、戒告処分、減給処分、戒告処分と出されてきました。）

お申し込み、問い合わせ、会場

からしだね館 Tel:075-574-2800 Fax:075-574-0025

Mail:takeyama@karashidane.or.jp(担当:武山)

お名前 ご住所(所属) オンライン参加ご希望の方はメールアドレス…を記入して、メールまたはFAXでお知らせください。(傍聴参加も可です)

締め切り  
4月8日(土)



安倍元首相銃撃事件以降、旧統一協会の「宗教2世」の問題が大きく取り上げられるようになりました。それは今、エホバの証人にも及び、輸血拒否を子どもに強いることや、子どもをムチで懲らしめることが、児童虐待に当たるとして、社会問題になっています。

厚労省は、「宗教2世」への虐待をめぐり、ガイドラインを作成していますが、そのなかに、シヨックな文言がひとつありました。

「信仰しないと地獄に落ちる」と脅すことは、心理的虐待にあたる。

私はまさに「地獄に落ちないために」クリスチャンになった、クリスチャン家庭の子どもだったのです。ということは、私は心理的虐待を受けてい



に行かなくてもよくなった」状態から落ちてしまわないように、「良い子でい続けること」が大問題になり、神様はそんな私の行動を天国から常に監視している神様になってしまいました。たとえば「部活で礼拝を休んだ。今日中に悔い改めないと、死んだら地獄行き」みたいな…。

そんなことをあれこれ思い出しながら、私の周囲にいるクリスチャン家庭育ちで子どもの頃に洗礼を受けた人たちに「洗礼受けたのはなぜ？」と聞いてみたところ、「このままでは天国に行けないから(地獄に行きたくなくて)クリスチャンになった」と言う人が意外に多い、いや、ほとんどだというのに気づきました。

ために、神道の家育ちで高校生の時にクリスチャンになった夫に「なんで洗礼を受けようと思ったの？」と聞いてみたところ、「人生とは何か？自分はなんのために生きていくのか？と、思い悩んだから」という答えが返ってきました。「そんな高尚な(?)理由でクリスチャンになるなんて、私とえらい違いやん！」と、この時ばかりは夫がうらやましくなりました。

私は親から「洗礼受ける」と強制されたことは一度もなく、「地獄に落ちるぞ」と脅されたこともありませんでした。教会でも「地獄行き」みたいな言葉で私を追いつめる人は誰もいませんでした。

たということになるの…?

思い返すと、子どものころの私は「死ぬ」ことをたいへん怖れていました。そして、死んだ後に「天国」と「地獄」どちらに行くことになるのかが大問題になっていました。寝る前には必ず「神様どうか眠っている間に死なないようにしてください」と、お祈りをしていたのを思い出します。

その後、私は、仲良しだった友達に洗剤に便乗するような形で、「この際、あなたも洗礼受けたら?」みたいな、やや強引な牧師さんのお勧めトークに追いかけて回されたこともあり、そのトークから一刻も早く解放されるにはもう洗礼を受けるしかない!みたいな気持ちになって、中学1年生のクリスマスに洗礼を受けました。「これで、地獄に行かなくてもよくなった」とすぐくほっとしたのを覚えています。

ただし、よく教会の大人の人たちが「証し」の中で話す「救われて、心が喜びに満たされました」みたいな、あるいは「人生の大転換」みたいなことは全く起こらなくて、そういう大転換的な経験と「救われてクリスチャンになる」ということはイコールだと思いついていた私には、ちょっと当てが外れた洗礼でもありました。

さて、ほっとしたのもつかの間、今度は「地獄」それなのに、私の思考回路は、勝手にそうなっていました。いったいこれは、どういふことなのでしょうが…

ひとつ考えられるのは、教会学校で、キリスト教の教えの一つとして、「死んだ後に、裁きがある」と教えられていたことです。京都には、西福寺という有名な地獄絵図が飾ってお寺がある、「悪いことしたら、こんな悪いところに行くんですよ」と、大人は子どもたちに教えます。秋田のなまげなんかも「悪い子はいねえが」と恐怖で泣き叫ぶ子どもを脅すといひます。

さてどこまでが道徳的な「躾(しつけ)」「や」宗教教育「で、どこからが「心理的虐待」になるのでしょうか?

私にとって、教会学校の友達や先生と過ごした時間は宝物のような思い出です。教会の大人の人たちはみんなあなたと私たちを見守ってくださいました。それは、本当に感謝しかありません。私の子ども時代、神様はたしかに「愛の神様」だと教えられていたはずなのに、なぜあんなに「怖い神様」になってしまったのか…?

かつて子どもだった皆さん、一緒に考えてくださいませんか?

( ) からしだね書店店長 坂岡恵

## 【オンライン読書&トーク会のご案内】

日程 2023年5月5日(金) 13:30 ~ 15:30  
参加申込 clc@karashidane.or.jp (担当:坂岡恵) まで。

お名前と、クリスチャンの方で差し支えない方は、所属教会を教えてください。おすすめ本があれば、教えてください。

申込締切 4月末日\*ニックネームでの参加もOKです。

### テーマ 「宗教2世」と「クリスチャン家庭の子ども」

—地獄に落ちないために、がんばる子—

厚労省から宗教2世への虐待「ガイドライン」が示されましたが、クリスチャン家庭や教会学校は、今、子どもたちにどんなふうにかかわっているのでしょうか? 「心理的虐待をしていません」とちゃんと説明できる、私たちの「ガイドライン」とは、何でしょうか? このテーマからおすすみたい本があれば、その本の紹介と、そこから考えたことも、語り合えたらと思います。どなたでもお気軽に、ご参加ください。

## 古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただくとありがたいです。(受付できないものもありますので事前にお知らせください。ご事情により当店より回収に行かせていただくこともあります。ご相談ください)

### 【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本 (多少、書き込み等があっても、大丈夫です)
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし (料理、健康、経済等) にかかわる本
- 5 小説 (人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画 (人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

百科事典・辞書・開封済みの  
CD・DVD・月刊誌・週刊誌等は  
受け付けておりません

### 【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館

宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX075-574-0025

Mail：clc@karashidane.or.jp

### 【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

### 【献本感謝】

藤井久美子様、高橋卿子様、加茂みなえ様、美馬里彩様、匿名様2名 (順不同)

**2月の古書の収益は49,000円でした。【古本の売上を含むCLCからしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思います。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。**

### 編集後記

◆春がやってきました。皆さま、お元気で過ごでしょうか？◆イースターを前に、いまだ戦禍にあるウクライナ、大地震が起きたトルコ・シリアで暮らす方々のことを思います。いのちが守られ平和が訪れますように…。◆八王子市の精神科病院で起きていた職員の患者さんへの日常的な虐待…。先日、NHKでも特集で放送されましたが、まさかここまでひどいとは思っていませんでした。とてもショックでした。とても他人事とは思えません。私たちのすぐそばで起きている非人道的な出来事にも目を背けてはいけなと、あらためて思いました。◆いのちの息吹を感じる春。どうぞ皆様、からしだね書店にお立ち寄りください。美味しいランチもご用意して、お待ちしております。【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね  
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス  
からしだね書店&カフェ・トライアングル  
〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館  
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025  
書店メール clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店だよりの  
バックナンバーはこちらから

